新建新聞　10月15日付

この地でがんばる ⑤⑥

高澤建築㈲（飯山市）

山本 雄司（やまもと ゆうじ）さん（31歳）

プレッシャーはねのけ完成

今年の4月から約半年間、会社が本社を置く飯山市内で〝お宮〟（坂井地区「伊勢社」）の新築の棟梁を務めた。社寺建築での棟梁は自身初。苦労は多かったが、やり遂げたあとは「大きな自信になった」と語る。完成後、お披露目も兼ねた秋祭りで地元の人たちが喜んでいる様子を見たり、新しいお宮をほめてくれる言葉をかけてもらえたとき、「うれしかったと同時に、ほっとした」と振り返る。

初めての社寺建築

山本さんが棟梁として完成させた飯山市坂井地区にある伊勢社

地元の人たちが大切にするお宮を新築する大仕事。引き受けたとき、知った両親からは、「大丈夫なのか、できるのか、と心配された」と笑う。図書館に通い、ネットでも調べながら勉強した。住宅に比べ、材料が格段に多く複雑で、大きさもまるで違う。彫刻を施した高価な部材も含まれており、「間違いが許されない墨付けのプレッシャーは想像以上だった」と思い出す。休日に家族で出掛けても神社を見かけると足が自然とそちらに向き、「夢の中でも墨付けに悩まされた」。

建前が無事済んだあとは「やるしかない」と開き直った。大工の技を存分に生かせる仕事だと楽しみながら向き合った。8月の追い込み時期は、ほぼ休日なしで仕上げに追われた。「妻や息子（3歳長男）には、いろいろ我慢してもらったが、火事場の底力が出た。やる気になればできるもんだなと思った」と笑顔を見せる。

10代で大工の世界に飛び込み、技術を磨いてきた。昨年から長野県建設労連主催の信州職人学校で伝統技術や構造について学ぶ。2年目の今年は応用コースで、毎週土曜日、実技を含む盛りだくさんのカリキュラムを受講しながら、「信州伝統大工」の称号を目指す。お宮の新築の仕事では、職人学校で学んで得た知識や、継ぎ手や仕口などの技術を生かすこともできた。学校の講師を務める現場の第一線で活躍するベテランの棟梁たちが良き相談相手にもなってくれたという。

共に学ぶ「志の高い仲間たち」の存在は大きい。互いに励ましあいながら、大工を取り巻く厳しい現実の中で、「技術を生かした仕事をしていきたい」と言い切った。